

## 添削と解説

名前	佐藤 真紀子
ID	13456D
e-mail	makiko@.....
開始日	2002.1.14

## 【添削】

筆者は障害者の行動を制限しているのは、障害そのものではなく、健聴者が障害者と意思疎通ができないと考えるせいだという。それに対して、ヴィンヤード島は、遺伝的に**聾者聾の障害者**が多い状況に、社会全体で適応した。つまり住民が英語とともに手話を使うことで、意思疎通が可能になり、聾者が職業生活を営み、社会に貢献することができたのである。このことから、耳が聞こえない、目が見えないなどの障害は、必ずしもその人の能力を規定せず、社会が「障害者」として規定するから差別されることがわかる。

もちろんヴィンヤード島には特殊事情がある。工場などの都市型労働でなく自然相手の労働であること、**また** 遺伝的に聾者が多かったことは重要だろう。前者では、人間相手と違い、複雑な伝達能力より体力や個人的判断力が重視され、耳が聞こえないことは重要な問題でなくなる。また聾者の人数が多いことから、そのメンバーを積極的に活用しなければ、経済生活が成り立たなかったという事情もあろう。しかし、この島の経験が現代の都市社会に適用できないと考えるのは間違いだ。

なぜなら都市の環境は、情報化と高齢化の進行で大きく変化しているからだ。**その変化の中では、これまでの障害者は障害者として規定されなくなる可能性がある。たとえば、**近代社会では、職業は工場労働の観点から組織された。大きな場所で一斉に組織的に働くという形式である。これでは、周囲と合わせるために、直接的で複雑な意思疎通が要求され、障害者はその能力が**低いというこ**~~とで、~~低く評価されてしまう**ことになる**。ところが情報化社会では、そのような就業形態は必要**なくなる**。自宅でコンピューターを使って仕事をすれば、他人と直接話をしなくてもいい。音が聞こえなくても、文字が読めれば十分仕事はできる。耳が聞こえないことは**このような社会では**「障害」にならない。**つまり社会の形態が変われば、聾者は障害者とは認定されないのだ。**

さらに、都市は高齢化に応じて、その形態が変わってくる。つまり身体が不自由になっても、自由に移動できたり生活できたりする環境になるのだ。これは障害者にと**って**も有利だ。~~車椅子が自由に通れる通路、耳が不自由でもわかりやす~~

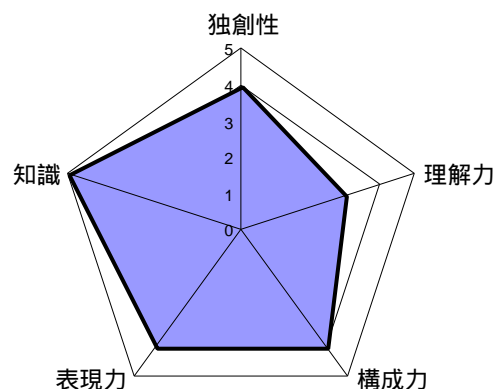
~~い標識など、高齢者と障害者の利害は一致するからだ。~~このような環境では、障害者はより自由に行動でき、社会に貢献もしやすくなる。このような事態に備えて、健常者も障害者との仕切りをはずすべきだ。優れた能力を持つものを「障害者」として疎外するのは、社会にとっても損失となるからだ。

## 【week3 の評価】

全体に言葉がやや難しい。言葉はできるだけ名詞化しないほうが、わかりやすくなる。第三段落の冒頭はポイントを前に出すという大原則の例。最初に内容を抽象的に規定しておいて、それから「たとえば」などでサポートする。このような構成をとると、内容がすっきりと表現できる。

後半のアイディアはとてもいい。障害社の問題に情報化を絡ませたところは、応用力として高く評価されるだろう。ラストの段落は、結論部なのでもう実例は出さないこと。結論部分なので、簡潔に終わらせた方がよい。

独創性	4
理解力	3
構成力	4
表現力	4
知識	5
総合評価	B



## 【解説】

設問の表現に気をつける!

小論文では、書くことだけが重要なのではない。むしろ読むことが大切な場合がある。課題文はもちろんだが、設問から分かることも多い。この設問では、設問の表現が解答の書き方のヒントになっている。

なぜなら設問をよく読むと、解答はいくつかの条件を満たさねばならないからだ。「ヴィンヤード島で起きた『自然の実験』を手がかりにして、『健常者』と『障害者』の共生について」自分の考えを書けというのだから、『健常者』と『障害者』の共生について」と「手がかりにして」、そして「自然の実験」という三つを解答に反映させねばならない。

では、いったいどうやったら解答にこれらの条件を盛り込めるのだろうか?

### 1 「健常者」と「障害者」の共生について

カギカッコがついていることに注意しよう。その意味は何だろうか? 論文的文

章では

カギカッコ=社会通念・社会常識(たいていは間違っている)

という約束がある。だから「健常者」と「障害者」と世間では言っているが、本当にこの概念が正しいかどうか、吟味する必要がある。つまり、「健常者」「障害者」という通念に疑問を持ち、自分なりにとらえ直すことが必要なのである。

「健常者」は、本当に健康で通常の状態、「障害者」は身体に障害、つまり何らかの不具合を持つ人と考えていいのだろうか？ もちろんそのように決めつけてはいけない。では、どのように考えたらいいのか？ そこが考えどころである。

## 2 「手がかりにして」の傍点

課題文の内容から離れないように注意する。そのためには、要旨・要約をしてから、書き出すとよい。一般に課題文付きの設問では、第一段落で要旨を書くのが適当であろう。その後自分の主張を持ってくる。

また「手がかりにして」というのだから、日本の「障害者」の状況との対比・比較をするとよい。たとえばヴィンヤード島と違って、日本では「障害者」が差別されている。それはなぜか？ ろう者の人数が少ない、効率性が重視されている、あるいは、経済体制が違うから(漁業と工業)など、いろいろ考えてみよう。

## 3 「自然の実験」

この比喩は、ヴィンヤード島ではたまたま島民に聴覚障害者の遺伝が多かったことを言っている。「実験」の結果は、14 行目にあるように、「社会的に適応してみせた」ことである。つまり、ここから「障害者」がいても、社会がそれに適応してうまくやっていたことが、照明される。だとしたら日本でも、「障害者」が差別されず、適応することもは可能なはずである。日本の状況が変わる条件は何か、考えることが出来る。

すなわち、書くべき内容は以下のようなになる。

- a 「健常者」「障害者」を自分なりに定義する
- b 課題文の要約を第一段落で書く
- c 日本の状況と対比する
- d 日本の状況が変わる条件を考える

## 【解答例の構成】

- |      |                        |
|------|------------------------|
| 1 要約 | 課題文の主張                 |
| 2 主張 | 健常者/障害者の区別も、社会によって作られる |
| 3 対比 | 使用会社への差別が残る日本社会の分析     |
| 4 提案 | 共生への可能性                |

## 【解答例】

ヴィンヤード島では遺伝的にろう者が多かったが、その事態に社会の方が適応した。つまり健聴者の方が手話を覚え、実生活で英語と同じように使ったことで、ろう者が社会生活に積極的に参加し、社会貢献できたのである。彼らが障害者として意識されないほど、共同体に溶け込んでいたのである。このことから、ろう者の活動を制限しているのは、障害そのものではなく健聴世界との意思の疎通がないことであると、筆者は言う。

このエピソードは「健常者」と「障害者」の区別が、自然により決定されたものではなく、共同体によって規定されたということを示す。我々は「障害者」というと、体の一部が不自由で、人間本来の行動ができないというイメージを持つ。相手の行動が、不自然だったりぎこちなかったりすると特別視して、普通の方法では接することができない。その人の個性ではなく「障害者」と一括りにして捉えてしまう。この感情はケアしたり手助けをしたりなど、善意の行動にも発展するが、反面、差別にもつながる。ヴィンヤード島の例は、健常者/障害者という二項対立が、手話というコミュニケーション手段を使うことで、あっけなくなってしまうことを示している。

もちろんこの島では、遺伝的にろう者の数が多く、健聴者も手話を覚えなければ、社会生活が円滑に進まなかったという事情もあろう。日本ではろう者の割合がこの島ほど多くないので、健聴者が全員手話を覚えるという選択も、コストがかかりすぎかもしれない。しかし我々がここから学ぶべきなのは、「障害者」が必ずしも社会生活不適應者を意味せず、十分社会に貢献できるということである。

ある意味では、人間は皆何らかの仕方で社会に依存して生きている。毎日血圧降下剤を飲まなければいけない人は、医療に依存して生きている。しかしそのような人を「障害者」とは呼ばない。持病があっても通常の生活を営んでいるとみなす。それは社会の側に、彼らを受け入れる病院という制度があるからである。それなのに車椅子に乗っているだけで、「障害者」として特別扱いをする。つまり「障害者」は、その存在を社会が排除したときに生まれる観念にすぎない。共生は「障害者」が「健常者」に、あるいは「健常者」が「障害者」に合わせることを意味するのではなく、相互に個人としてコミュニケーションする可能性を探ることから始まるのだろう。